

綿毛はどこへ ～夢はでっかく、根は深く～

東京都北区立飛鳥中学校

風見 郁江

中嶋塾@東京 2023 を卒塾してからあっという間に1年が経ちました。令和6年度の私自身の取り組みを振り返ると、新しい出逢いと挑戦の日々でした。多くの学びを与えてくださった中嶋先生を始め、さらに広がったご縁と自分の力を信じてくれる仲間に、そして挑戦させてもらえる環境に心から感謝して、ここに学びをまとめておきたいと思います。

1. 地に足をつけて、しっかりと根を張る

卒塾後の私は、中嶋塾で学んだ「思考ツール」の活用と「育った姿からの逆算」、そして「中間指導」を大切に教科経営・学年経営をすることを心がけました。特に「中間指導」については、生徒の学びのサイクルの中に位置付ける大切さを実感しています。教科の単元計画に限らず、運動会や合唱発表などの学校行事においても、この「中間指導」を活用することで生徒の力を伸ばすことができるからです。

令和6年度に受け入れた新1年生（筆者の所属学年）は、人に話すことが好きな学年でした。入学当初は「人前でスピーチをすることが恥ずかしい」「原稿を見ないと話せない」と、人前で話すことの抵抗感を訴えてきます。しかし私は知っています。最後は堂々と話せるようになることを。笑顔を浮かべ、ときに涙を流しながら、教室の仲間に自分の言葉でスピーチをすることができます。「あなたたちは必ず、自信をもって人の前で話せるようになります。」そう言って一年をスタートさせました。そして、一年後の最後の授業は「この一年の自分の成長をクラスの友達に伝えること」と決めました。

人前で自信をもって話をするために、さまざまな場面を作りました。思考ツールを使いこなせるようにすること、「聞くこと→話すこと→書くこと」の順で、徐々に指導の角度を変えながらスパイラルで知識と技能を高めていきました。課題を自己選択・決定し、アウトプットできる場面を学期ごとにそれぞれ作りました。話すことへの抵抗が少なくなってきた頃に、「書くこと」の指導で構成力と表現力をさらに強化します。いずれも単元計画の中に「中間指導」を位置づけ、生徒の気づきを促し、言語化させながら修正を図る「推敲」を大切にしてきました。生徒は協働学習の中で、互いに刺激し合い、気づきを通して自分の中に取り入れようとしています。誰しもができるようになりたいからです。最後にはマンドラートとマッピングを自分で使いこなし、人前に出ても自信をもって笑顔で自分の思いが伝えられる、そんな生徒に育ちました。



2. 私が咲かせたい花とは

なぜ私は「協働学習」を大切にしているのでしょうか。ただ現行の学習指導要領に記載されているから、ということではありません。これは国語科の教師として私が大切にしていることと関係しています。私は生徒たちに、人との関わりの中で、言葉を通して他者から学び、自分を知るということを大切にしてほしいと願うからです。本田先生から飛鳥の会のお受けした時、「「中間指導」について話すのはどうか」と提案がありました。そこで私がなぜこの活動を継続しているのか、改めて考えることにしました。中嶋先生から教えていただいた「中間指導」は、協働学習の中で生徒の相互評価を通して成り立ちます。授業で協働学習が成立するのはどんなときでしょうか。自分を安心して出せる環境であること、自分

の余力を人のために使おうという気持ちが生まれる関係性、頼ったり頼られたりが自然とできる信頼関係があることだと私は思います。だから私は授業（教科指導）を通してそれを強化します。そして学級経営（学級指導）を通して、さらに様々な教科へ還していくことを大切にしているのだということを、改めて気づくことができました。

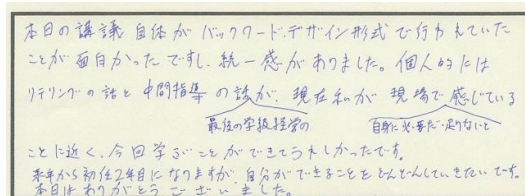
英語教育飛鳥の会の発表では、本田先生の見事なストーリー構成のおかげで、参加者の心に一本の串としてメッセージが届きました。学級経営をとおして集団と生徒一人ひとりの心を育てていくこと、言語活動をとおして心が通う場面を作ることの大切さが伝わったのではないかと思います。そしてやはりそこに必要なのは、宮崎先生のように理論に基づく正しい指導・実践や、高杉先生のように深呼吸のできる安心した環境づくりとナラティブを楽しめる余裕があることです。また、山内先生のように生徒一人ひとりを思考させ力を引き出すことと、松山先生のように基本に立ち返り羅針盤で方角を確かめることも忘れてはなりません。生徒一人ひとりの個性や可能性を活かすことで、異なる考えが組み合わさったり、よりよい学びが生まれたりすることを、生徒自身に実感してほしいと願います。生徒が自分の存在を認められる場面や、自分の学びや行動が周囲に影響を及ぼすことを実感できれば、学んだことを自分の人生に活かしていこうとする主体性が育つからです。様々な生徒が互いの違いを認めて協力し合える学級づくり（土壌づくり）が根底にあれば、学習の質が向上していきます。異学年間や他の学校との学び合いでも同じことが実現できます。この考え方を学校全体で共有できれば、生徒一人ひとりに自信をつけ、自分だけの色鮮やかな花を開かせることができるのではないかと思います。



3. 綿毛はどこへでも

研修の合間に、私立高校の英語科の先生や、（株）インタラックの方々と話をさせていただきました。飛鳥中の教科間連携の効果や、思春期特有の羞恥心の克服、母語の重要性についてご質問や相談を受けました。英語教育を学ぶ大学生や、同じ校区の小学校国語科の先生までもが、私の話に耳を傾けてくださったことにとても嬉しく思います。「校種や教科を超えても、原理・原則は変わらない」と確信した研修会でした。根幹は変わらないことへの再確認や、「やってみよう」とポジティブな気持ちを引き出すことができたのは、登壇された先生方が参加者へ与えた「納得感」だと感じます。参加者の「学んだことをいかしてみよう」という意欲の高まりに、自分も役立てる喜びを感じることができました。

今回の研修も含めて、今年度の私が自分の取り組みの意義や伝えていく使命感を覚えた場面は、若手教員を含む同僚や教員と「対話」を通して学び合いができたときです。



令和7年度は、次の3つに力を入れて研修を重ねてまいります。

- ①協働的な学びを通した学級・学年づくり（教師も協働）
- ②言語指導（国語・英語）のカリキュラム連携（教科の協働）
- ③小中連携（国語）とTT授業（校種・異学年で協働）

こうして発表と発信の場があることによって、自己更新（教師年輪を刻む）のチャンスをいただけたことに心から感謝します。